第23回大学教員研修プログラム参加の報告

医学部保健学科　細　見　博　志

期末試験を翌週に控えた平成14年1月26日（土），（財）大学セミナー・ハウス主催の第23回大学教員研修（FD）プログラムに一泊二日で参加してきました。50万の人口は金沢よりも大きな八王子ですが，郊外の野猿峠でバスを降りれば，確かに昔は猿も出たであろう多摩丘陵の林が残っており，セミナー・ハウスはその一角に建っています。今年で財団設立40周年を迎えるとのこと。30年ほど前に学生として利用した時は，できたばかりのぴかぴかだった建物も，至る所にがたが来ていて，本館の階段の摩耗具合が寄る年波を感じさせます。当時の学生もいまは花の中年，建物も老朽化して当然かと，しばし感慨にとらわれました。夕方には雪が降り，一面真っ白な中に，欅が四方八方に落葉した枝をのばして立っていました。

今回のテーマは「学生を活かすカリキュラム」。ちなみに先回は去年の9月で「授業を分析し，創造する」，先々回は去年の1月で「大学の教育力」。募集定員はいずれも80人。先回も先々回も目一杯の応募があったようですが，今回は56人で大幅に下回りました。また分科会に出て驚いたことに，半数以上の方がいわゆる「業務命令」で，学内の教務や評価やFDの委員として「仕方なく」と答えていました。それは，よく言えば，派遣元の大学が如何にFD活動に力を注いでいるか，ということを如実に示しています。それはまた，FD活動が大学評価の一指標として用いられつつある，というご時世を反映するものです。セミナー・ハウスは，年2回，このような研修を開催してかれこれ12年，今や着実に普及しつつあるFD活動の草分けを自任しており，また事実その通りなのでしょう。しかし現実には，FDの普及と同時にFDの形骸化，FDの自己目的化が進行しつつあるのではないか，という皮肉で深刻な問題が広がっているように思われました。

全体会では5つの提題があり，冒頭の提題を除いた4つの提題について分科会が構成されました。冒頭の提題で基調講演にあたるものは，千葉大学園芸学部で西洋文化史を担当している山内正平さんの「高度専門職業人養成とはいうけれど── 学生に対する教育責任をどう果たすのか──」でした。千葉大の改組に伴い，旧教養部のドイツ語担当から，あえて畑違いの園芸学部緑地・環境学科に移った山内さんですが，旧の造園学科の名称がなくなり基本概念が曖昧になったこと，就職難でそれがさらに加速されたこと，自分たちの環境文化史の教室が「迷い子たち」の避難所になっていること，などを紹介されました。金沢大学にも共通する問題で，他人事とは思えませんでした。しかし，ではどうしたらよいのか，そしてそれをカリキュラムにどう反映させるのか，といった具体策にはほど遠く，「学生を活かすカリキュラム」というテーマの掘り下げにはつながらないままに終わりました。その後の4つの提題も，それぞれ特定の問題を扱っており，全体を貫通する問題意識の明確化には最後まで結びつきませんでした。

各論的な提題の第一は，北海道文教短大の鈴木貢さんの「学生を活かす教育体制の構築」で，学生が自らの到達度を評価する学生の自己評価，教員研修（FD）と職員研修（SD）の関連づけ，などが強調されていました。しかし不勉強な私にはあまりに一般的抽象的な話であり，逆に詳しい人には，「それでどうしたの？」と聞きたくなるところで終わったようです。

第2題は，金沢工大の服部洋一さんの「自ら学び行動する学生を育む金沢工業大学の夢考房と工学設計教育」でした。この提題は極めて具体的な話で，多くの参加者の関心を引きつけていました。従来の受身的な教育から，「自学自習できる」学生を育むために導入されたのが，一つはカリキュラムの「工学設計」であり（1995年から），

もう一つは，その2年前から始まった課外活動の「夢考房」です。特に後者は，専用の建物2棟，技師20名，同数の学生スタッフを擁し，文献を調べる時には図書館，もの作りをする時には「夢考房」と，常時開設して学生の需要に応えているとのことでした。そこではさまざまなプロジェクトが学生の自主的な営みとして運営されており，優秀な学生が集まっているそうです。しかし利用学生は，のべ250名，全体の3%，という数字を聞いて，今の段階ではアドバルーンの域を出ていない，と密かに感じました。それもあってか，服部さんの抱負は学園全体の「夢考房」化とのことでした。

次は京大高等教育教授システム開発センターの藤岡完治さんの「大学の授業はどのように行われ，学生は何を学んでいるか── 大学の授業の参加観察を通して──」でした。京大のセンターは授業観察に熱心に取り組んでいることで知られていますが，今回は授業デザイン，授業リフレクションを中心にした報告でした。しかし具体的に授業をどう組み立てたらよいと言っているのか，よく分からないままに終わりました。

最後は，リクルート社で『カレッジガイダンス』などの編集長をしていた大江淳良さんの「『学生のキャリア開発』支援のカリキュラム開発」。自ら法政大学経営学部で「ビジネスキャリア論」を講じた経験の紹介，あるいはリクルート社で同僚だった市川幸子さんが武蔵野女子大学で実施した「キャリア・インフォメーション」の紹介を通して，就職斡旋という昔の考え方から，職業を通じて学生が成長する契機としての「キャリア開発（ディヴェラップメント）」の重要性を説明してくれました。

その後は4人の講師の下で分科会が構成され，当日夜のディスカッションとパーティ，翌日午前の同じ分科会と全体会というプログラムでした。私個人は職業選択・就職斡旋等には直接関係しませんが，職業に直結する部局（保健学科）に籍を置くことから，職業直結の良い点も悪い点も考えたいと思い，第4分科会の「キャリア開発」を選びました。結果的に参加者の3分の1以上，20人が第4分科会に出席しました。他の分科会に比べてテーマが明確だったことが選択の理由だったろうと思います。この分科会では，同様の授業の導入例が武庫川女子大などにあること，企業での実習（インターンシップ），ICUにおけるボランティア活動の単位化（サービス・ラーニング）などが参加者から紹介されました。他方，防衛大や商船大，看護大のように，職業に直結するところでは取り組む必要性が希薄だという指摘もありました。講師の大江さんは，就職のためのキャリア開発ではなくて，当人が適性を見いだすためのキャリア開発であり，現在は「一部上場企業に何人就職した」ということが大学の「売り」になっているが，一方に「就職した学生の3分の1が3年後には辞める」という事実があり，キャリア開発によって「3年後の離職率は5%である」と誇れるような環境をつくることこそ重要なのだ，と力説していました。私はこのような適性開発が重要なのは大学だけでなく，偏差値の優劣で大学の学部を選んでいる高校生にこそ必要だ，と意見を述べました。大江さんは，確かにいわゆる「進学校」こそ職業に関する授業が必要であるにもかかわらず，そんなところに限って一切なされていない，と応じていました。

翌日はうってかわって青空になりました。最後の全体会で，「学生を活かす」というのは「活性化させる」という意味だ，という言わずもがなの説明が主催者からありました。そんな当たり前のことを言わなければならないほど，そのテーマは議論の中で煮詰められないままでした。「隔靴掻痒の感」「腹ふくるる思い」を抱きながら，でもこのテーマは自ら担い続けるしかないな，と自分に言い聞かせながら，帰途に就きました。（平成14年2月4日）